

利用土地ノ農地トシテノ利用ガ明ラカニ自由ニ利用スル事ガ出来ル様ニ  
ナツタノデス

処ガ其ノ後間モナク供用地ノ税金ハ免税トナリマシタガ共有地ノ利用ハ  
区ノ評議員会デ決定サレタ問題デシタノデ私クシガ会長時代ハ以前ノマ、  
テ過ゴシテ来テ居リマシタ

(一九八八年一月四日受理)

下甌各青年会が青年団ニ變ルト同時ニ麓戸主会モあけぼの会トナル

初代会長 竹之内元春氏

二代会長 橋口有常氏

三代会長 小川実満

江夏実英村長在任中ニ起ル三部落ノ会合ノ内容

当日出会者

一、巡田部落ヨリ 吉留佐一郎<sup>(ママ)</sup>、川畑勝五郎氏、川畑伊之次氏、横

道半之進氏、浜添助次氏

一、浜部落ヨリ 長辻米太郎氏、竹中憲吉氏、赤石新之助氏、江夏

盛太氏、江口正照氏、大重加市氏其ノ他

一、麓部落ヨリ 戸主会役員全員、和田正光氏、小川実満

会合ノ初日ニ浜代表者ヨリ明治三十九年官有地払下ハ手打界在ハ手打区民ガ払下ゲ<sup>(ヲ受ケ)</sup>タモノニシテ其ノ払下ゲ代金ハ当時ノ手打ノ戸数ニ割当テ、支払シタモノデ手打内三部落共其ノ地区内デ取り立テ、時ノ手打区長江口甚市氏ヘ渡シテ有ルト申シ立テラレタ

次ニ巡田部落ヨリモ浜部落ノ様ニ申シ立テララレタ、其レニ巡田部落ヨリハ美濃山ノ造林地ハ明治四拾年三月ヲ第一年トシテ其ノ後ハ毎年ノヨウニ苗ノ植付ケ又ハサシ木ヲ仕テ来タモノデアツタ、其造林地見舞モ年間ヲ通シテ麓七ヶ月在四ヶ月ノ割り合デ行コナツテ来タ、造林ヲ麓ノ人達チハ一方テキニ雑木林ヲ処分シ杉ノ残木モ全部麓ダケデ処分シテ其ノ

後茶畑ニシタリ杉ナドノ造林ヲシ其ノ上岡<sup>(青)</sup>年会デ建テタ紀念碑ハ後トカタモナク埋メテサラニ又麓戸主会ハ払下以後共有地ハ手打区ニヲイテ何事モ司取ツテ来タモノヲ戸主会ガ勝手ニスルト言フ事ハ許サレナイ問題デアル、タゞ今申シ上ゲタ二部落ノ申立テニ返事ヲ聞カセテモライ度イ

以上ノ様ナ二部落ノ問イニ麓ヨリハ戸主会ヨリモ<sup>(役員)</sup>役員以外ノ方々ヨリモ一人トシテ相手方ニナツトクノ行ク返事ヲサレル人ハ居ラレナカツタ

其ノ時ノ三者ノ会合ハ三日続キマシタガ最後ノ一日ニハ残念ナガラ麓ヨリハ一言ノ發言モ無ク二部落ノ言ワレル通りニなつた姿で終リマシタ私クシハ麓青年杜時代の足跡ヲ訪ネ又麓在<sup>(巡田)</sup>浜ノ三者会談の結果ヲ考エナガラ我レラ麓ノ進ムベキ道ヲ選ブベキデアルト考エマシタ末エ迫田直衛氏ガ役場ヲ退職サレテ手打区長ニ就任サレマシタ当時私クシハ麓アケボノ会長ノ立場デ又区ノ評議員デモアリマシタノデ区ノ評議員会ヲ開イテモライマシテ当時区ガ納メテ居タ税金ヲシンワ会アケボノ会石垣部落此ノ三者ニ納メサセルヨウニシテ手打区ガ払下テ居ル共有地ノ内麓在石垣ノ昔シノ木場ヲ立木<sup>(シ木セ)</sup>ノ利用土地ノ利用椿木ノ実等ヲ自由ニサセル事ヲ評議員ハ満場一致デ決定イタシマシタ、其レテ三部落ハ左ノ通り税金ノ持分ヲキメタノデシタ

麓六巡田四石垣<sup>(ママ)</sup>一ノ割合ヲ納メルヨウニキメマシタ、其レデシゼン木ノ

## 麓青年社夜学会々則

第一条 満廿齡以下ノ麓青年ヲ以テ組織シ麓青年夜学会ト称ス

但年齡以外ノモノト雖希望ニヨリ會員タル事ヲ得

第二条 智ノ修養各自ノ親睦ヲ厚クスルヲ以テ目的トス

第三条 本会ノ目的ヲ達スル為メ左ノ事項ヲ行フ

1、本会所定ノ休業日及ビ他ノ課業アル場合ノ外毎夜二時間ヅ、学業ノ補習ヲナス

2、毎年二月中毎夜柔道ノ修練ヲナス

但シ便宜組ヲ分ツコトアルベシ

3、毎月二月ヲ除ク二回十日廿日撃剣会ヲ開ク

4、隔月一回第四土曜演ノ古討論会ヲ開ク但シ都合ニヨリ伸縮変更スル事アルベシ

第四条 学修ハ当分個別的教育ヲ加味シタル左ノ組別ニヨリ之レヲ行フ

1、研究部 高等小学校以上ノモノ自由研究ヲ主トス

2、甲部 尋常六年程度以上ノモノ

3、乙部 心力甲部ニ及バザルモノ

但シ成績ノ如何<sup>(ママ)</sup>ニヨリ隨時上下ノ編入ヲ行フ

第五条 甲乙部ノ学科目ハ国語算術農業科トシ其ノ程度及教科書等ハ小

学校令ニ準ジ会長之ヲ定ム

第六条 教科中修身科ヲ特設セズト雖臨時先輩ノ講話ヲ乞ヒ又本会役員

ニ於テ必要ニ応ジ指導ヲナスベキモノトス

第七条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

会長一名 青年社ノ選舉シタル人任期二ケ年

教授者二名以上 会長推薦ニヨル

第八条 教授者ハ会長ノ命ヲ受ケテ專指導ノ任ニ当ル

会長ハ毎週一回以上出席スベキモノトスル

第九条 本会ノ經費ハ會員ノ負担トシ稍重大ナル用途ニ付イテハ麓青年社ノ補助ヲ受クルモノトスル

第十条 品性ヲ砥励シ学業ヲ上進セシメン為メ隨時会長ニ於テ賞罰ヲ行フ

第十一条 出席ヲ奨励セン為メ組合ヲ設ケ劣等組ヲ以テ週間ノ掃除ヲナサシメ且無届欠席者ニ過怠金ヲ徴ス

第十二条 本会ニ左ノ帳簿ヲ置ク

1、會員名簿 役員名簿 出席簿 賞罰簿 日誌 諸規則綴等ヲ備フ

第十三条 本会ノ休業日

日曜 祝祭日 招魂祭 農繁休日<sup>(夏秋二回会長之ヲ定ム)</sup>

第十四条 本会則ハ麓青年社ニ於テ社員三分ノ二以上出席アル場ノ議決ヲ經ルニアラザレバ変更スル事ヲ得ズ

麓あけぼの会発足〔昭和二年三部落協議会の記録〕

一、 ” 迫田池龍氏

一、昭和二年 手打内在浜両部落ヨリノ申立ニヨリ麓戸主会ト右両部落  
ニ下甌村ヨリ会合ノ日時ノ通知ヲ受ケタ、会合ノ目的（手打共有地ノ  
件）会合ノ内容ハ別記ス

### 麓青年社ノ重ナ事業

一、明治四十三年武士踊ヲ初メル

一、明治四十四年山林保護組合ヲ設クル

1、カナ子百合栽培ヲ各自ニ栽培セシメタ

2、火事予防ノ為メ夜警実施

一、大正二年山林保護組合ヲ設ケタ

一、 ” 柔道再興サル

一、手打青瀬両区ノ従前ヨリ保護シ来タル境界踏査

一、従前ヨリ手打ノ見舞地ハ他区ノ境界内ト雖モ之レニ造林施設ヲナス

一、大正七年危険物取締方実施以後毎年

### 追記

一、大正四年御即位大典記念造林事業ヲ実施

大筆三、七四九番地七反五畝歩杉

一、明治三十八年一月三日ヨリ十七日迄デノ晴夜ニ国民軍召集ノ例アリ

シニ付キ各個教練ノ稽古ヲナシタ

一、明治三十九年柔術再興、希望者ニテ一週二回組合員ノ家ニテ古来手  
打ニツタワル二流ノ内希望ニマカセル

一、柔術ノ幹旋役「鍋信流 鈴木流 伊三、次郎太」以上四氏

一、明治四拾年社員年齢ヲ三十三才マデニスル事ニシタ

一、美濃山ヲ人民ヨリ青年社代表者ニ引継ギヲ受ケタ

一、大正八年諏訪神社、八幡神社招魂碑前ニ桜樹栽植実施

一、茶円支部ヲ表彰シタ

一、農具及ビ種子協同購入ヲナス

一、青年団員ノ年齢ヲ卅才迄トシタ

一、馬匹品評会ヲナス

一、推肥舎建築ノ件可決シタ

一、墓地花□器ニ砂子瓶ヲ用イナイヨウニシタ

一、里道案内標ヲ建設シタ

一、馬匹品評会ノ賞与 （一等二円 二等壹円 三等一円）（賞与ノ多イ支部ニ与フ）

一、丁年マデ喫煙飲酒セザル事、大正三年ヨリ実行今日ニ至ル

一、十五夜ノ綱引きノ行事ヲ青年（社）ニ於テ引き受ケ大正四年度ヨリ

実行（綱ノ材料ノ取立方法綱絢捧等ニ関スル一切ノ事ヲ責任ヲ持ツ事

ニシタ

一、大正七 years 下甌聯合青年会ヘ加入、同時手打青年会発足（手打内ニ在、

白崎、麓、石垣、浜ノ五青年団支部ヲ持ツテ組織ス 以上

一、橋口健之介氏建碑

大正十年二月

会長竹之内元春、副会長永山親友

評議員 尾崎孝照、小川実満外

支部長 各組ヨリ一名アテ選出

一、事業 青年社発足以後ノ業務ヲ実行シタ

一、大正十年手打共有地ノ税金ヲ麓青年会ヨリ村役場へ納入スル事ニ決議実行シタ

大正十一年 永山親友会長トナル

一、前年（大正十年）手打共有地ノ税金ヲ麓青年会ニ於テ納入セシモ手

打区ノ知ル処トナリ十一年度ヨリ手打区ニ於テ納入スル事ニナツタ

一、麓戸主会発足ノ声高マル

一、麓戸主会発足協議会ヲ大春郷江口喜十郎氏宅ニ於イテ開会ス

一、当日出席者

イ 青年ヨリ

竹ノ内元春、永山親友、小川実満外

ロ 有志ヨリ

江口喜十郎、和田計、小川正彦、江口忠行、橋口小十郎氏等外数名

一、会合ノ主旨

イ 麓住民ガ生キテ行クニハ旧麓木場地ヲ麓住民ガ自由ニ利用シテ行く以外ニハ他ニ道ハナイ、其ノ為メニハ麓ニ大キイ力ノアル団体ノ発足ガ必要且急務デアル

一、麓戸主会発足スル事ニ決シタ大正拾年<sup>（ママ）</sup>

一、麓公民館建設ニ付イテ

イ、新設スル事ニシ宅地ニ小川正彦氏ノ土地ヲ買イ受ケタ、材木等各部落ヨリ供出シ且不足ノ分ハ在部落ノ承諾ヲ得テ美濃山ヨリ補充シテ立テタ

一、麓戸主会初代会長

会長 江口忠行氏

副会長 橋口小十郎氏、和田計氏

一、戸主会員

一、麓ノ戸主ヲ主体トシ麓ノ住民ヲフクムヲモツテ麓戸主会員トスル

一、戸主会ノ事業ト目的

イ、旧麓ノ共有地ノ獲得ト利用

一、現役員体制デ三期続ク

一、麓青年会長ニ迫田池龍氏ヲヲス

一、第四期戸主会

一、会長 江口忠行氏

一、副会長 江口甚十郎氏

一、秋季茶実ヲ注文シ各自播種スル事

一、長浜ニ開会ノ聯合青〔年〕会ノ件ニ付キ協議スル

一、御即位大典紀念トシテ小川六郎、吉永一郎右衛門、有馬セン、松田モト以上四氏ニ天杯<sup>(盃)</sup>或ハ酒肴料御下賜相成タレバ本社ヨリモ菓子一包ヅ、贈呈ス

第十一期 〔自〕大正五年二月〔至〕大正七年一月

社長松田邦針、副社長迫田喜源、夜学会長和田正直

評議員 迫田直衛、江口密治、和田正光、江口五十澄、永山千春、竹

ノ内元春

部長 橋口勝志、永山弘文、鳥居一角、橋口新衛、長浜秀利、延時涉、

尾崎千文、橋口徹、小川弘親

副社長平校ニ転任ニ付後任ニ江口密治氏当選

第十二期 〔自〕大正七年二月〔至〕大正九年一月

麓分会長松田邦針、副会長小川正彦、夜学会長永山千春

評議員 和田正知<sup>(和か)</sup>、和田正光、原崎種敏、江口五十澄、竹ノ内元春、

和田正直、会計原崎種敏

一、麓海浜ニ松苗植方ヲナス

一、麓在青年二人ヅ、出テ美濃山造林地見舞ヲ毎月輪番ニ行フ

一、維持金トシテ各拾五錢ヅ、出資スル事

一、柔道師範役ニ謝礼スル為メ夜学会員ヘ金二円補助スル事

一、備品ノ仕末<sup>(始)</sup>ヲ良クスル為メ道具入箱ヲ購入スル事

一、小屋床椿山ノ下払ヒヲナス

一、武士踊師範役ニ報酬トシテ薪ヲ進呈ニ付キ沓錢輪一束ヅ、持参ノ事

一、柔道稽古ニ取締役ヲ置キ二十五才迄デ出会練習ノコト

一、柔道ノ先生ニ薪ヲ差上ゲル事ニシ稽古者中ヨリシ本会ヨリモ適當ナ

品ヲ進呈スル

一、道ノ修繕ヲナス(自宅附近)

一、造林記念碑ヲ立テル(小屋庄)

一、甘薯試作桃苗注文ヲナス

一、茶種共同購入

大正九年二月ヨリ

麓青年会長松田邦針

評議員 和田正光、江口五十澄、永山千春、竹之内元春

支部長 橋口勝志、木原茂哉、永山弘友、長浜秀利、尾崎千文、延時

涉、橋口有友、小川弘文

一、落花生ノ種一斗注文一升代拾錢

一、トマトノ試作ヲナス事

一、防風林仕立各員二本アテ

一、桃苗注文

社長江口密治、副社長迫田喜源（副社長辭任後任、有馬清淳（五月））、會計兼務迫田直衛

評議員 江口豐士、江口今彦、吉永五郎、坂口恕市、鳥居平

一、四月十日美濃山造林地杉穂二千本植付

一、七月四日本県師範学校教諭田中秀次郎氏ニ乞ヒ法雲寺ニ於テ満州對

我外交政策勤儉貯畜ニ関スル講話ヲ聞ク

一、本年積立金貳百四十二円十三銭

第八期 自四十五年一月至大正貳年一月

社長坂口恕市、副社長種田央（渡台ノ為ノ辭任、後任迫田喜源）、會計兼務迫田直衛

評議員 吉永秀実、江口豐士、江口今彦、鳥居平、春山直和

部長 松田源四、小川若治、吉永稲市、春山直志、永山嘉兵衛、松田

順熊、長浜一角、長浜西州、橋口大治

一、柔術ノ励行

一、資金ノ増殖ノ為メ社員ヨリ金二十銭アテ出資積立ヲナス

一、造林下払造林見舞ヲナス

一、村出身陸海軍人へ慰問状ヲ贈ル

第九期 （自）大正二年二月（至）大正三年一月

社長松田邦針、副社長江口密治、夜学会長迫田喜源、副社長橋口五十（全）

澄、會計兼務坂口恕市

評議員 江口豐士、江口今彦、橋口新之介、迫田直衛、和田正光

部長 松田純孝、佐伯直道、永山盛房、日笠山弘哉、上山建彦、藤田

重熊、橋口満士、橋口新衛、江口源之丞

一、瀬尾美濃山ノ境界ノ実地踏査ヲ行フ

松田仁一、日笠山市郎次、江口要之進、永山藤之進、延時庄助、橋口

源左衛門、川添平次、大重嘉三、橋野伝一、内一平、平野源太

一、三月六日美濃山下払ヒ杉穂押付ケヲナス、穂数二〇アテ

二月二十日海浜ニ防風林仕立ヲナス、松苗二本ヅ、

五月十一日十二日十三日美濃山、学林地、横道楠苗植付ケヲナス

十月十八日招魂祭 武士踊り奉納

第十期 （自）大正三年二月（至）大正五年一月

社長橋口新之介、副社長江口密治、夜学会長迫田喜源、副会長江口義

照、會計兼務松田邦針

評議員 江口今彦、迫田直衛、和田正光、江口五十澄、永山千春

部長 橋口有友、尾崎孝照、江口林衛、迫田源衛、植村清香、橋口満

志（マヤ）、橋口小藤太、橋口時衛

一、社長橋口新之介氏大正三年十二月五日鹿兒島市ニテ病氣 補欠撰

挙当选橋口加運多氏

一、御即位大典ノ祝意ヲ表スル為メ秋期武士踊ヲナス

一、昨年ノ大風ニ痛マサレタ桃ニ李桃ヲ接木スル事

一、〃一円五拾銭 延時左吉、坂口恕一<sup>(市)</sup>

一、〃一円 橋<sup>(口)</sup>精熊、江口岩多、吉永秀実、和田計、江口豊士、

春山直知<sup>(和カ)</sup>、橋口求、迫田守八郎、松田宇源、和田正盛、橋口武雄、

橋口新之介、種田央、吉永五郎、鳥居平、江口密治、江口今彦、有

馬清淳、麓義典

一、金七十銭 松元兼盛、橋口五十澄、松田純孝

一、〃五拾銭 迫田直衛、橋口元彦、橋口犀二、橋口小十郎、鳥居知

二、江口彦熊、曾木藤左衛門、内間榮志

一、金五拾銭<sup>(マ)</sup> 浜添助次

一、金式拾銭 永山再司

一、十月三日旧九月九日招魂祭ヲ行フ

一、十二月二十一日青年農事組合組織

第五期 明治四十二年一月至四十四年三月

社長橋口新之介、副社長種田央

夜学監督橋口加運多、会計兼務迫田直衛

評議員 江口豊士、吉永秀実、坂口恕市、江口今彦、江口密治

一、部長 迫田新衛、日笠山源兵衛、江口敬助、原崎市<sup>(マ)</sup>、長浜秀哉、

原崎実弘、江口佐衛友、有馬龜太、原崎種年

一、資金増殖ノ為メ薪切りヲナシ百五十円ヲ積立テタ

一、武士踊用太鼓六個修繕費陣羽織四枚旗新調等約二十円支出

一、招魂祭、杉下弘、瀬尾椿山仕立テ実施

一、夜学会ニ時計ヲ備フ

一、美濃山植林事業ニ県知事ヨリ補助金参拾五円七十五銭ノ交附受ク

一、種子田尚堅、竹ノ内良助、(前死亡者)松田城之丞、小川利三次、迫

田米盛、松田正身、以上死亡者ニ吊旗ヲ送ル

一、義士伝朗読会ニ参加

一、武士踊再興記念トシテ有馬<sup>(マ)</sup>兵衛氏ニ茶器一組寄贈

第六期 自四三年二月至四十四年二月<sup>(マ)</sup>

社長種子田央、副社長江口密治、会計兼務迫田直衛

評議員 吉永秀実、江口豊士、江口今彦、坂口恕市、春山直知<sup>(和カ)</sup>

一、部長 和田新、上山武秀、純浦新熊、橋口厚士、松田隅衛、江口

司、江口熊衛、鳥居一角、橋口勇

一、資金増殖ノ為メ薪切二回実施金六十円ヲ得ル

一、柔道再興二月ヨリ四月迄デ

一、杉穂八千本差付ク

一、防風林松苗浜地区一帯へ移植

第七期 自四十四年三月至四五年一月<sup>(マ)</sup>

一、招魂碑前ノ点燈決議実行

一、通信講□会開催

一、節句ノ贈答物廃止ニ付キ村長ニ建議スル事

第四期 自明治四十一年二月至四十二年二月

一、役員

社長坂口恕市、副社長江口今彦

夜学会取締 江口密治

評議員 橋口新之助、種子田<sup>(ママ)</sup>央、江口豊士、鳥居平、春山直和

會計兼務 迫田直衛

部長 日笠山紋十郎、日笠山操、松田隅衛、曾木清治、小川源太、

江口佐衛友、永山盛房、橋口二衛、松田純正

一、明〔治〕四十一年麓在青年社員共同シテ美濃尾山杉穂押付施行但シ

杉穂一人ニ付キ四十本宛テ(他人ノ所有林ニ立入り被害濫伐ヲ戒シム)

一、三月廿二日麓浜在ノ三青年ヲ手打麓説教場ニ集合セシメ東別院管事

来島ヲ好期<sup>(機)</sup>トシテ修養演説ヲ願イタリ

一、五月四日区会へ節句ノ贈答物廃案提出セシモ不〔採〕扱トナリ伝染

病発生間ニ際シ村長適宜廃止スル事トナル

一、招魂祭日旧九月九日ニ確定実行セリ

一、六月十九日郡農会ヨリ前田技手橋口書記一行本村農事視察ノ為メ出

張ニ付キ麓在青年ヲ手打説教場ニ集合セシメ両氏ノ農事講話会ヲナス

一、八月十二日麓在浜有志会ニ於テ瀬尾木場地林一切ヲ麓青年社所有ニ讓受ケ仕配監督ノ□ニ椿林造殖ノ□□儀約束決定ス

同時ニ從來区共有学資本二版セシ本地上納金ヲ本社基本金トシテ四十二年度ヨリ貰ヒ受ケ積立ノ契約決定ス

一、美濃尾山ト青瀬区(瀬尾川内)トノ境踏ミ切方法ノ決議ハ区長時期

ヲ図リ其ノ經驗アル有志ニ通知シ両方立合ノ上決定スル事ヲ約ス

一、八月廿三日麓在青年共ニ杉下払ヲナセリ、同日瀬尾木場地域踏ミ切ノ為メ實驗アル老年者ヲ雇ヒ入レ実地測量ニ従事ス、人名ハ左ノ通り

松田在八郎、吉永要之進、永山嘉七郎、江口隅之進、小川嘉太郎

青年

橋口新之介、種子田<sup>(ママ)</sup>央、江口密治、有馬清淳、江口今彦、日笠山紋十

郎、日笠山操、永山光房、松田隅衛、小川源太、江口佐衛友、松田純

義、松田<sup>(ママ)</sup>弘熊、松田良之十、橋口義熊、小川正治、坂口恕<sup>(市)</sup>一、江口綱義

瀬尾木場Ⅱ北ハ瀬尾道下(下ツテ右側)東ハ松田在八郎氏所有ノ畑二

枝通りノゾク上ヨリ南ハ保安林切立石ヲ限リ川分ケ

一、武士気風ヲ養成スル為メ夜学会員ニ擊劍術毎週土曜日夜ル稽古

指導主任時ノ駐在巡查徳重清右衛<sup>(ママ)</sup>氏、教受者有馬清淳、橋口義雄、松

元氏(電信員)、麓義典等助力セラル

一、要具購入ノ為メ応分ノ義捐ヲ有志ニ募リタルニ左ノ寄附ヲ得タ

一、擊劍道具一組 江口忠行

一、金二円 鳥居形太郎、橋口加運多

一、金一円五拾銭 橋口求、鳥居平、江口綱義

一、金一円拾七銭 種田央、迫田喜源、橋口秀士、江口岸多

一、金一円 春山直和、多賀精美、坂口恕市、松田宇源、吉永五郎

一、金八拾銭 橋口元彦、吉永秀実、江口六郎太、和田計、和田惠盛、

有馬清淳、橋口犀二、鳥居知二

一、金金五拾銭 横道半之進、横川伊五郎、浜添助次

不足額五円ハ浜青年会ヨリ来タル三十四円中二拾四円ノ慰勞費ヲ引去

リタル残額拾円ヲ在青年会ト等分シタル五円ヲ充用ス

一、本期間附属青年夜学会ノ講師ヲ命<sup>(者)</sup>ジタル事

橋口五十澄、永山光房ノ両氏

第三期 自明治四十年二月至四十年二月

一、役員

社長 橋口新之介

副社長 種田央

夜学会取締 迫田喜源、六月辞任、後任 江口密治

評議員 江口喜十郎、鳥居平、吉永五郎、迫田直衛、有馬清淳

会計兼務 和田惠盛、九月死亡、後任 坂口恕市

部長 和田城之丞、永山光房、吉永稻市、江口甚十、原崎種一、

和田正光、松田広熊、永山盛房、植村清武

一、従来二名ナリシ副社長ヲ一名トシタル事

一、新二夜学会取締ヲ公選スルニ決シタル事<sup>(従来ハ社長任命)</sup>

一、社員ノ年ヲ三十三齡マデトシタル事

一、明治四十年三月廿六日在青年会ト共同シ麓ノ民間ノ許シヲ得テ千本

迫全枝迫赤木迫ニ約一万五千ノ杉苗ヲ差付ケタル事

一、同日<sup>(美濃)</sup>ミノ山全体ニ雑木林ヲ仕立テタル事

イ 濫伐ヲナスモノアリシ時ハ青年ノ協議ニヨリ処罰スル事ヲ人民ト

約束ス

ロ 青年外ニシテ特ニ助力セラレタル人

江口六郎太、浜添助次、川添平次、江口甚市

一、明治四十年四月郡農会ヨリ本村農会エ交付セラレシ杉苗四百本ヲ乞

ヒ受ケ前記赤木迫ニ植付ケタル事

一、同時ニ森監督方法ヲ左ノ如ク決議実行ス

イ 年中 七ヶ月 麓青年社員 監督者掛長各支部長

ロ 同 五ヶ月 在青年会員 責任者同会会長

一、明治四十年三月左ノ諸氏ヨリ寄附ヲ受ケ招魂碑前ニ瓦斯燈二個ヲ創

建ス

一個鳥居平氏、一個日露戦役者遺族松田佐八郎氏

外二名

柱材及工事一切(瓦斯燈)橋口八太氏

一、夏秋両回杉地草払ヲナス

## 松苗ヲ移植シタル事

一、水源林ノ濫伐ヲ禁シタル事

一、青年社附属夜学会ヲ創立シ読書作文算術農業ノ初歩等ヲ教科目トシ二十才以下ノ青年ヲ入会セシメ毎夜二時間教授ヲナシタル事

一、武術ノ再興ヲ決議シタルモ教授者<sup>(道)</sup>導場等ノ都合ニヨリ実行スルニ至ラズ

一、招魂碑設立ヲ決議ス

## 第二期 自明治三十九年二月至四十年二月

## 一、役員

社長植村清、副社長橋口新之助、迫田喜源

評議員 種田央、橋口求、春山直和、江口綱義、鳥居平、橋口秀士

部長 迫田新兵衛、吉永稲市、小川若治、江口次郎太、迫田源吾、

松田右内、松田純義、植村清武、迫田直衛

會計 和田恵盛

一、役員ノ任期ヲ一ケ年トアラタメル事

一、夜学会ノ年齢ヲ二十五才マデニ延長シタル事

一、武術ノ再興ハ度々議セラレタルモ前期ト同様ノ運命ニ陥キリシ事

一、明治三十九年一月ノ總會ニ於テ招魂碑建設ヲ決シ在浜両青年会ニ交渉シテ其ノ賛同ヲ得連合協議ノ末費用約五十円ヲ区費ヨリ支出セラレ

ン事ヲ建議スルニ決シ採用セラレテ勞力一切ヲ三青ノ負担トシ(約千日)同年二月二十六日工事ニ着手シ四月一日落成ヲ告グルヲ得タリ、浜青年会ハ勞力ノ代リニ金三十四円ヲ支出シ麓在両青年ノ慰勞トシ以テ共同ノ趣旨ヲ明ニシタリ

関係者 本社役員外

村長鳥居形太郎、校長橋口加運多、区長江口甚市

在青年会长浜添助次、浜青年会长中村津太郎

工事監督江口彦熊、石工渡辺甚次、吉永早市

碑石台石其他一切ノ石材ハ手打字垣内及手打小緑ノ二ヶ所中野戸次郎、長浜中左衛門、藏野五七、森田八太ノ所有地ニ埋没シタルモノヲ発掘シテ之ヲ得タルナリ

一、前記(招)魂碑掃除修繕其ノ他一切ノ經營ハ三青年(会)ニ於テ其ノ任ニ当ルベキ事ヲ決議ス

一、同年五月凱旋祝ノ拳アラントスルニ当リ明治元年後廢棄サレタル盆ン踊ヲ再挙シ毎年一回招魂祭ト共ニ日露戰役ノ記念トシテ該踊ヲ実行スル事ヲ決議シ総額五十二円八十錢ノ□捐ヲ有士<sup>(志)</sup>ニ仰ギ再興ノ実ヲ挙ケタル事

## 寄附者

一、金二円八拾錢 鳥居形太郎、橋口加運多、□瀬貫脩、植村清

一、金二円 延時左吉、橋口新之助、橋口精熊、小川忠行、積堅城、中村知服、吉永市次

報告は本地域研究所の総合研究「甌島の産業と文化」の成果の一部である。

其ノ他下略

## 【史料】

### 第一編 成立

明治維新前ニ於テハ所郷士ニ才党ト称シ青年間ノ団極メテ厚ク互ニ武道ヲ砥励シ艱難相救助シ来レルモノ、政体ノ改革社会組（織）ノ変更ト共ニ不識不知其ノ結合ヲ緩メ武ノ修練モ学修モ寺小屋式ノ指導修練モ影ヲヒソメ昔日ニ才党ノ面影漸ク地ヲ払ハントスルニ際シ強烈ナル個人主義主我ノ氣運都鄙ヲ通シテ蔓延セルヲ以テ共ニ提携誘導スベキ青年間ニ於テモ只管自己立身ノ計ニ驅ラレテ亦他ヲ顧ミルノ遑ナク断々個々共同一致ノ精神ナク□□發展ノ道欠如シ從テ風紀ハ日ニ紊乱シ士氣ハ月ニ消沈シ未来ノ繼承者タルベキ青年ノ価値存タルニ至レリ、茲ニ於テ有志ノ士ハ常ニ此ノ悲運ヲ挽回センモノト憂慮計画セラル、コト多年ナリシガ明〔治〕三十七年一月逐ニ橋口加運多氏等主唱ノ下ニ本社<sup>（設）</sup>伐立ヲ見ルニ至レリ、目的及組織ノ梗概ハ左ノ如シ

第一条 本社ハ麓青年社ト称シ十五才以上二十五才以下ノ青年ヲ以テ組組ス

第二条 本社ノ目的ハ社員ノ心身及生活ノ發達進歩ヲハカリ兼テ共同一致ノ精神ヲ涵養スルニアリ

### 第二編 變遷及事業

社長ノ任期間ヲ以テ各期トシ記述ス

第一期 自明治三十七年一月

至明治三十九年二月

二ケ年間

#### 一、役員

社長 橋口加運多、副社長 橋口新之助、同 迫田喜源

評議員 種田央、鳥居平、橋口秀士、春山直和、迫田宇八郎、江

#### 口綱義

部長 和田新、吉永稻市、橋口武秀、江口伊三次、和田恵盛、松

田右内、和田正光、橋口五十澄、橋口大治

一、此期間ハ基礎ノ鞏固ヲ計ルヲ第一ノ眼目トシ年数回ノ会合ヲ催シ意思ノ疏通ヲナシ和親ノ実ヲ挙ゲル事ニカメタル事

一、軍人ノ送迎ヲナスベク決議実行シタル事

一、社員共同薪伐ヲナシ資金ヲ作ル事一回

一、青年社員ノ希望者ヲ高等科夜学会ニ入会セシムル様決議実行ス

一、本社組織ヲ變更シ年断ヲ三十三才マデトスル事

一、在方青年ト協同シ防風用トシテ大泊ヨリ小泊ノ下ニ至ル海浜一帯ニ

村となった。このとき旧村は町村制の定める区となったが、手打区はさらに麓・在（巡田ともいう、現在は本町）・浜（石垣ともいう、現在は港）の三部落に分かれた。村役場の置かれた麓は士族の部落であり、在は農民の、浜は漁民の部落である。

史料Hによると、一九〇六（明治三十九）年官有地払い下げにより手打区有になった土地（美濃尾山等）について、払い下げ代金は区内各戸が負担し、翌年から始めた造林事業に在部落も一定の負担をしてきたにもかかわらず、麓部落が勝手に処分していたという。そうしたのは何時からであろうか。史料Bは、一九二一（大正十）年「手打共有地ノ税金ヲ麓青年会ヨリ村役場へ納入スル事ニ決議実行シタ」が、それは翌年「手打区ノ知ル処トナリ十一年度ヨリ手打区ニ於テ納入スル事ニナツタ」と記している。事態がここで済めば問題化はしなかったであろう。ところが史料Bはこれに続けて、「麓戸主会発足ノ声」が高まり、「麓住民が生キテ行クニハ旧麓木場地ヲ麓住民ガ自由ニ利用シテ行ク以外ニハ他ニ道ハナイ、ソノ為メニハ麓ニ大キイ力ノアル団体ノ発足ガ必要且急務デアル」との主旨のもとに麓戸主会が発足し、同会の目的に「旧麓ノ共有地ノ獲得ト利用」を掲げたと記している。おそらくこれ以降に史料Hがいうような問題が起こったのであろう。一九二七年、村の斡旋で三部落の協議が開かれ、その結果、税を区ではなく各部落が負担することによって、区有地を実質的に各部落有に分割する形で（木場といわれる各部落の入会地がその中心となる）決着をみたのである。ただし本史料は、

その税の負担割合を麓六、巡田四、石垣一としているが、これは明らかにおかしい。和田正穂氏（後出）から見せていただいた一九四八（昭和二十三）年十一月十二日の手打区評議員会の記録では、麓六、巡田三・五、石垣〇・五とあり、おそらくこれが正しい負担割合であろう。

ここには区（部落）の行政への統合を命じる町村制の趣旨と異なる実態がある。そして、旧支配層であった麓住民と他部落住民との旧然たる関係が根強く残っていること、入会地がその地の住民とていかに大きい存在であったかなど、考えさせる問題は少なくない。この問題について、あるいは戸主会発足後の青年会の問題等について、明らかにしなければならぬ点が多く残されているが、それは今後の課題としたい。

#### 四

本史料を掲載するに当っては、明らかな誤字を訂正し、判読不能の文字を□で表した。また統一性をもたせるために、読点や段落ちなど原文の体裁を若干修正した所もある。うち読点の一つ書きの箇所、人名・地名の並列、改行なしに文章が続く場合に限り付した。なお、史料B等にしばしば出てくる瀬尾川内と美濃尾山（美濃山とも記されている）は青瀬区との境界にある地域と思われるが、現在残っている小字名の地域と一致しない点もある。この他にも史料に出てくる地名でそうしたものが若干あり、これも今後明らかにすべき課題である。

末尾ながら、本史料を提供され、種々の質問にも御答え下さった麓部落の和田正穂氏（現在、手打区長）に厚く御礼申し上げる。なお、この

後者については創立の経緯と共有地の使用・税負担をめぐり起こった事件（後述）に関する一九二七（昭和二）年の会合の様子が記されているにすぎない。なお、「麓戸主会」が「麓あけぼの会」に名称変更するのは本史料（後出のG）によると「下甕各青年会が青年団二変」った時とのことであるが、目下のところ、その正確な年月日は不詳である。

## 二

本史料の筆者はあけぼの会第三代会長の小川実満氏である。小川氏は高小卒後、阪神地方で働いたのち徴兵により入隊、除隊後の一九一八（大正七）年帰郷し、在郷軍人会の役員を勤めるかたわら、麓青年社・戸主会等に関与し、大正後期から昭和戦後間もない頃まで、地域リーダーとして活躍した人物である。

本史料の原文は次のような構成になっている（〔〕内は編者が付加したもの）。

第一編 成立……………	A
第二編 変遷及事業……………	B
麓青年社ノ重ナ事業……………	C
麓青年社夜学会々則……………	D
下甕村ノ沿革……………	E
下甕村歴代村長……………	F
麓あけぼの会発足（昭和二年三部落協議会の記録）……………	G
奉仕作業の内揚（および説明）……………	H

このうちA～Gは片仮名交じり文であるが、Hは平仮名交じり文で、「昭和五十五年七月三十一日」の日付がある。A～Gに記述の日付はない。こうした形態上のことと共に内容上からも、Hは他とまったく性格を異にするので、ここには掲載しないことにした。ちなみに、それは、小川氏が大正七年帰郷後、在郷軍人会の役員等として、橋の修築・拡幅事業を奉仕作業として行ったことなどを記したものである。またE・Fは関連史料としての意義をもつが、異なる主題であるため、これも載せないことにした。よって、ここに掲載したのはA～D、Gである。

出典・所蔵箇所は記されていないが、形態・内容から、A～Dは小川氏が入手した麓青年社の記録を写したものと思われる（ただし一部の省略はあろう）。Gは協議会の場に居合わせた小川氏自身のメモ類に基づいて記された可能性が強い。小川氏が九〇歳を超える高齢のため未だ親しくお話をうかがうことができず、このような形でしか紹介できないのは、編者自ら遺憾とするところである。

小川実満氏が本史料を著した動機の最大のものは、上記の史料構成からして、麓部落の入会地に関する歴史的経緯を明らかにしようとしたことにあると考えられる。麓部落は入会地をめぐり手打地区内の他の二部落との間で、戦前において争論を起こしている。掲載史料のBの末尾部分とGはまさにそのいきさつを示すものである。

一八六九（明治二）年、下甕島には手打・片之浦・瀬々野浦・青瀬・長浜・蘭牟田の六か村が置かれ、一八八九年この六か村が合併して下甕

## 〈史料紹介〉

### 薩摩郡下甌村手打地区の 麓青年社・戸主会に関する史料

阿部恒久編

#### 【解題】

ここに紹介する史料は、一九〇四(明治三十七)年一月設立された薩摩郡下甌村手打地区の麓青年社および一九二二(大正十一)年それを母体に組織された麓戸主会(あけぼの会)に関する資料である。

前者については、創立から一九二二年までの事蹟のほぼ全部が記されている。付属夜学校の設立、植林等の公共事業、招魂碑の建立および招魂祭の実施、武術の修練、各種講話会の開催、入会地境界の踏査、武士踊の再興、甘薯・落花生・桃の試作等の事業と、各期の役員の動向を知ることができる。本県では、この期の青年会の活動は史料的に充分明らかにされているとはいいがたい現状であるため、紹介する次第である。

旧若者組(鹿児島県の士族層では二才組)を源とするものが多い青年会は、全国的に、日露戦争前後から夜学会と結びつつ設立されるよ

うになる。とりわけ日露戦争直後の一九〇五年に出された内務省の青年会の向上発達督励に関する通牒および文部省の青年会の設置・指導に関する通牒、さらに〇八年の第二の教育勅語といわれる戊申詔書の發布を契機として、上からの青年会設立が進められる。鹿児島県では一〇年、青年指導に関する訓示が出され、青年会は、家族並びに国家の一員としての自覚の養成を根本目的とし、教育勅語・戊申詔書の趣旨の徹底、忠孝の大義の体得、敬神の風の涵養、模範人物の設定、実業思想並びに実用的知識と常識の修得等を目的に組織するように指導された(鹿児島県教育委員会編『鹿児島県教育史』四八一頁、一九七六年)。また一九一五(大正四)年内務・文部省の青年団体の指導・設置に関する共同訓令により、青年会は修養団体として位置づけられるに至った。こうしたなかで青年会が自主性を喪失し、かつ在郷軍人会の指導を受けるようになることは、一般によく知られている。

本史料によると、一九一四年二月―一六年一月(第一〇期)の間に長浜で下甌村内の聯合青年会が開催され(このとき下甌村聯合青年会が発足したかどうかは不詳)、麓青年社は一八手下甌村聯合青年会に加入と同時に五支部からなる手打青年会の支部(麓支部)に改組されている。これは前述の上からの青年会再編の動きに連なるものであろう。そしてその頃から本史料の記述が簡単になってくる。なお、青年社の社長には小学校長を推した場合が多いように見受けられるが、役員選出のあり方、実際の運営等については今後の検討課題としたい。